

研究室活動報告

A 教育哲学研究室

1977年度における教育哲学研究室は、人事の面で幾つかの異動があった。磯田一雄準教授は今年度初めから、成城大学文芸学部に移られた。これに伴い、今年度は非常勤講師として「中等教育概論」および「教育課程および教授法」の講義を引き続き担当された。磯田準教授の後任として、林昭通専任講師の秋学期からの任命が教授会で承認されたが、8月における交通事故のため、着任は78年4月に延期された。川瀬謙一郎準教授は77年9月から78年2月までサバティカル・リーヴを取り、研究活動に専念した。76年1月、病に倒れ、以後入院加療を続けてこられた日高第四郎客員教授は、77年12月14日、肺炎のため死去され、同19日大学葬が行われた。

研究活動は研究室員がそれぞれに自己の研究課題に取り組み、学会報告や研究誌等に研究の発表を行なった。

a. 教育哲学

小島軍造教授（客員教授）

健康を害し、引き続いて自宅にて療養中。

金子武蔵教授（客員教授）

大学院において、西洋教育思想史の演習（マルコ伝福音書の研究）を担当した。ヘーゲル「精神現象学」改訳が完成した。

讚岐和家教授

I 研究活動

1. 1977年度は、ヘルバルトの教育思想を主題として研究した。
2. 前年度にひき続き、国立教育研究所における「大学院の組織形態と研究指導体制に関する総合的研究」に所外研究員として参加し、理科系大学院の場合についての実態調査の分析と検討に協力した。
3. 文部省科学研究費助成金による総合研究「西洋倫理思想の日本における受容に関する研究」（代表者は千葉大学白田貴郎教授）に研究分担者として参加した。
4. 民主教育協会主催の「学生生活研究セミナー」（第Ⅱ期の第3年次）に引き続いて実行委員として参加し、学生生活の研究を行なった。
4. 77年7月に発足した「関東地区私立大学教職課程研究連絡協議会」（仮称）の「設立準備委員会」に委員として参加し、私立大学の教職課程が直面している諸問

題を研究し、「協議会」の設立準備に協力した。

II 学会発表等

1. 「文部時報」1977年6月号所載の座談会「共通一次学力試験と大学入試改善の方向」に湊秀雄（東京大学教授）、長谷部正治（東京都立三田高等学校長）、楠川絢一（東京都立大学教授）、黒羽亮一（日本経済新聞社論説委員）の諸氏と共に参加し、大学入試の改善について意見を述べた。
2. 77年11月24日、日本キルケゴール協会の例会において、「和辻哲郎とキルケゴール」と題する報告を行なった。
3. 77年12月16日、上記Iの3に記載の総合研究の第5回研究会において、「和辻哲郎とキリスト教」と題する報告を行なった。

III 研究論文等

1. 「IDE学生生活の歩み」。「厚生補導」誌（文部省学生課発行）、1977年12月号。
2. 「和辻哲郎先生とキリスト教」。「和辻哲郎全集」（第2版）の第20巻付録月報（岩波書店）。78年6月発行予定。

以上

川瀬謙一郎

1. 研究主題

ウェーバーの宗教社会学を手がかりとして共同体の問題を考えること。

2. 学会参加その他。

- a 日本倫理学会第28回大会（1977年10月14・15日、於四国学院大学）において口頭発表「ウェーバーにおける『宗教的音痴』の意味」。共通課題「ギリシア思想とヘブライ思想をめぐる共同討議の司会に参加。
 - b 1977年度科学研究費助成による総合研究「西洋倫理思想の日本における受容に関する研究」（代表者：千葉大学白田貴郎教授）に分担研究者として参加。口頭報告「R.N. ベラーの和辻哲郎論」（78年2月）。
3. 論文「M. ウェーバーにおける宗教的音痴の意味」。大塚久雄教授古稀記念論文集に収められて78年刊行予定。

b. キリスト教教育哲学

中川秀恭教授

学長、兼学務副学長として多忙な職務に当たっている。

c. 教育思想史

長 清子教授

I 研究活動

1. 日本イギリス哲学会にて「日本におけるイギリス思想の受容——西周、福沢諭吉、中村敬守、加藤弘之における自由の概念をめぐる——」の総合司会、1977年

4月2日—3日。

2. The United Board for Christian Higher Education in Asia (UBCHEA) の理事会に出席，於ニューヨーク。1977年5月7日—12日。同中国問題特別委員会委員を委嘱される。また，ニューヨークにて，Japan-North America Commission on Cooperative Mission の集りにて発題。

3. 日本教育哲学会理事。同学会に出席（研究発表司会等），於九州大学。1977年10月5日—7日。

4. International Symposium on “Religion and Socio-Cultural Transformation in Asia” を主催（アジア文化研究所長として）。於ICU。10月27日—28日。内外の学者約140名参加。

5. UBCHEA 理事会（11月14日—16日）に出席。その後，ニューヨークにて開催の北米キリスト教主義諸大学とアジアのキリスト教主義諸大学との人事交流に関する会議に出席。

6. 国際文化会館評議員。同日米知的交流委員会委員。

II 研究論文・編著

1. 「天皇観の相剋」の論文を雑誌『世界』（岩波書店）に1976年より1977年にかけて連載したが，それにつづき，1977年4月号，6月号，1978年3月号に連載。

2. 英文論文 “Christian Dialogue with Traditional Japanese Culture”, *The Japan Christian Quarterly*, XLIV/1, Winter 1978.

3. 編著『明治文学全集』（第46巻），『新島襄・植村正久・清沢満之・綱島梁川集』（武田清子・吉田久一編），筑摩書房，1977年10月30日刊。A5. 470頁，解説論文。

III 講演，その他

1. “Christian Dialogue with Traditional Japanese Culture” を主題とする全国宣教師会議，於野尻湖畔国際村。1977年7月27日—29日にて主題講演。

2. アメリカの Presbyterian Church Women の代表団，「アジアの文化と人権問題」研究のシンポジウムに参加のため来日。“Christianity in Japanese Cultural Soil” の発題講演。11月9日。

3. ルーテル神学大学，世界ルーテル連盟（LWF）研究部門共催のシンポジウムにおいて「天皇制思想とキリスト教——日本人の価値意識の問題をさぐる——」と題し講演。於市ヶ谷ルーテル・センター，11月28日。

4. 日本女子大学教養講座にて「日本の土着文化とキリスト教」の講演。12月1日。その他。

d. 比較教育学

ベンジャミン・C. デューク教授

I 研究活動

The Supreme Court on the Gakute

II 著作

1. The Administration and Supervision of Education in Japan in THE INTERNATIONAL REVIEW OF EDUCATION, UNESCO, Hamburg, Germany, Special Edition published in 1977.
2. Learning To Be Japanese, A Collection of Readings, Edward Beauchamp (Ed.), Linnot Books, 1978
"The Textbook Controversy"

B 教育心理学研究室

梅津八三・古畑和孝両教授のご退任にともない、教科の構成ならびに講義の分担に大きな変動があった。特に大学院のカリキュラムについては、新しい陣容による指導プログラムを発足させた。

選衡委員会における慎重な審議の末、栗山容子夫人（東京女子大学卒業、東京大学大学院博士課程修了）を専任講師候補者として教授会に推薦した結果、過日承認された。就任は1978年9月の予定。

教育学科 Visiting Research Fellow として Glasgow 大学の Dr. Helmut Morsbach が再び来学、7～8月中滞在して母子関係の比較文化的研究に従事した。

日本学術振興会外国人招へい研究者として香港大学教授、Dr. Joseph A. Precker が1978年3月に着任され、4月より一学期間2コースを担当された。

研究室主催の行事としては、「ICU心理学夏季セミナー」を復活させ、大学院生の積極的な指導の下に、8月30日から9月1日まで八王子大学セミナーハウスに於て、教員・学生計41名が研修に参加した。また、心理学懇話会を今年度中に5回開催することができた。発題者と演題は下記の通りである。

5月17日 吉米地憲昭氏（小林病院）「精神病院における臨床心理士の活動の現状」

6月14日 岩瀬純一氏（千葉家庭裁判所）「司法における臨床活動」

12月13日 星野命教授「アメリカにおける民族集団とその地域生活——イタリア系アメリカ人の場合」

1月24日 平尾美生子女史（東京都教育研究所相談員）「教育相談の現状について」

3月1日 長谷川浩一氏（青山学院大学）「催眠法と自律訓練法について」（映画・実習と講義）

なお、恒例の卒業論文発表会は2月25日に開かれ、卒業予定者20名の研究成果が教員・院生・下級生も傾聴する中で報告された。

1976年7月より外国出張・休暇中であつた星野命教授は、77年7月1日に帰任し

た。

原 一雄教授

I 研究活動

1) 大脳半球機能的非対称性の研究

認知的判断における半球の優位性について

2) 喫煙の生理心理学的研究

ニコチン摂取にともなう脳波パターンの変化について。研究協力者の林茂樹君は研究成果の一部を学士論文「喫煙者と非喫煙者との特徴的な脳波の差異に関する実験的研究」にまとめた。

3) 高等教育の評価に関する研究

日本私立大学連盟大学問題検討委員会第六分科会で主査をつとめる。

4) 私立大学における国際交流の実態調査

日本私立大学連盟外国事情調査委員会主査をつとめる。

5) 大学における一般教育の実態調査

大学基準協会一般教育検討委員として国・公・私立大学の総合調査に従事中。

6) 千葉大学教養部（総合科目：認識と行動）で非常勤講師。

7) 第2回 I C U 言語科学夏期講座（1977. 7. 23～8. 5.）にて「Biopsychology of Language」を講義。

II 学会発表等

1) 1977年7月 第2回 I C U 幼児言語学シンポジウムにて「言語認知における大脳半球左右非対称性の研究」を発表。

2) 1977年10月 日本教育心理学会第19回総会（於香川大学）自主シンポジウムIV 「大学入試についての教育心理学的検討」にて「入学者選抜の原理と実際」を発表。

3) 1978年3月 日本私立大学連盟教員研修会（於静岡県掛川）にて「大学教育の質的向上をめざして」を講演。

III 著作

1) （村井資長共編）「私立大学の相互協力と自己点検——教育・研究の質的向上をめざして」日本私立大学連盟（1977. 10）pp. 101.

2) 「生涯教育に関する用語集」『外国教育事情』第4号（1978. 2）pp. 6～26.

3) （村上初穂共著）「生涯教育の理念と高等教育における実践」国際基督教大学学報 I—A 『教育研究20』（1978. 3）pp. 57—75.

4) 「In quest of new transdisciplinary concepts of “Environment” in education and culture」国際基督教大学学報 I—A 『教育研究20』（1978. 3）pp. 77—90.

5) 「喫煙の脳波に及ぼす影響 その1：喫煙者の脳波特性とニコチンの効果」T

A S C 研究報告 78U A0705 (たばこ総合研究センター) (1978. 3) pp. 36.

都留春夫教授

I 研究活動等

(1) 個人カウンセリング, グループ・カウンセリング, 各種の小集団活動の実践を通して, 小集団内の個人の行動, リーダーシップ, および対人関係の研究をおこなった。

(2) 佐治守夫東京大学教授, 平木典子立教大学主任カウンセラー, 小谷英文広島大学助手らと共に, 毎月1, 2回PCA (person-centered approach) ウィークエンド研修会を主催した。

(3) 他大学の有志らと共にカウンセリング・ケース研究, 文献研究などをおこなった。

(4) 学内においては, 学生のために「自己理解のためのグループ・カウンセリング」, 「カウンセリング勉強会」などを開催した。

(5) 国際教育交流室長として, 海外の諸大学と日本の大学との間の学生交換交流に関する研究をはじめている。

II 学会発表・講演等

(1) 日本相談学会: 第10回大会シンポジウム (東京・日本女子大学5月21日)「パラカウンセラーの養成」に発題者のひとりとして参加した。

(2) 日本心理学会: 第41回大会 (東京・国立教育会館, 9月初旬) に出席した (9月9日)。機関誌「心理学研究」掲載論文の英文アブストラクト数編の校閲をした。

(3) 対談「病気をどう生きるか」 (医学書院4月5日) に対談者のひとりとして参加した。

(4) PCAウィークエンド (研究会) に毎月11回世話人として参加した。

(5) 国立大学学生相談員の合宿研修会 (7月中旬) に講師として参加の予定であったが病気のため中止した。

(6) 映画と講演の会「自己発見への道」 (日本・精神技術研究所, 7月31日) に講演者のひとりとして参加した。

(7) 日本福音ルーテル教会東教区ディアコニア講座 (軽井沢, 8月3—5日) に世話人のひとりとして参加した。

(8) 全国社会保険病院看護婦研修会 (東京・10月24日および11月8日) において「病者のこころ」について講演した。

(9) 北里大学病院看護研究シンポジウム「癌末期患者の痛みに対する看護を考える」に発題者のひとりならびに助言者として参加した。

(10) 留学生問題研究会の合宿 (八王子大学セミナーハウス, 1978年1月15—16日) に出席した。

(11) 講演と映画の集り「わたしたちの生き方としてのP. C. A.」(日本・精神技術研究所, 2月25日)に講演者のひとりとして参加した。

(12) 北海道大学附属病院婦長研究会において「リーダーシップ」について講演した。(3月23日)

(13) 国立札幌病院附属看護学校において「援助と教育」について講演(3月24日)

(14) 海外出張: 1978年3月28日より, Philippines の Manila 郊外 Malolos で開かれた Association of Christian Universities and Colleges in Asia 主催の学生交流に関する会議に出席, 全期間を通して総合司会者となった。その後, 交換学生制度に関する連絡打合せのため Ateneo de Manila University, Silliman University, 中文大学崇基学院, 延世大学を訪問した。

IV 著作・辞典執筆等

1. 『カウンセリングとしての「なかまづきあい」(その2)——みいだすことのむずかしさ』「カウンセリング」Vol. 9—1 (No. 35), 1977. 4, 12—15頁

2. 『カウンセリングとしての「なかまづきあい」(その3)——病床で思ったこと——』「カウンセリング」Vol. 9—2. (No. 36), 1977, 7, 5—7頁

3. 『パラカウンセラーの養成をめぐる』「カウンセリング」Vol. 9—2 (No. 36), 1977. 7. 2—4頁

4. 『カウンセリングとしての「なかまづきあい」(その4)——まずよくきいてみよう——』「カウンセリング」Vol. 9—3 (No. 37), 1977. 10, 2—7頁

5. 『カウンセリングとしての「なかまづきあい」(その5)——患者—看護婦関係から学ぶ——』「カウンセリング」Vol. 9—4 (No. 38), 1978. 1, 8—11頁

6. 『人間としてのいのちを育てる教育』「医学と教育」Vol. 29 (No. 6), 1977. 7—9頁

7. 『病気をどう生きるか』(対談)「看護教育」Vol. 41 (No. 7), 1977—7, 663—672頁

8. 『最近の C. Rogers』河合隼雄・佐治守夫・成瀬悟策編「臨床心理ケース研究 I」誠信書房(1977年発行) 191—206頁

9. 『私のファシリテーター体験』村山正治編「エンカウンター・グループ」講座心理療法第7巻, 福村書店(1977年発行) 第9章

10. 『Tグループ, 感受性訓練, エンカウンターグループ』佐治守夫・水島恵一編「心理療法の基礎知識」有斐閣(1977年発行) 135頁

11. 『充実感の心理』「児童心理」Vol. 31 (No. 10), 1977. 10, 108—116頁

12. 辞典執筆「心理学小辞典」協同出版(1978年発行予定)に『感受性訓練』他数項目執筆

星野 命教授

I 研究活動

1978年1月より4月30日まで、ホノルルの東西センター Cultural Learning Institute において Professional associates として異文化間心理学研究の計画、方法などについて研究資料の検討・要約などを行なった。5月1日帰国後は、先に1977年7月より10月までシカゴ西郊で現地調査を行なって集めたイタリア系アメリカ人の諸資料の整理と報告書の作成に従事した。また7月20日および8月6日より14日まで新潟県松之山町に赴いて「自我形成と母子関係に関する比較文化的研究（科研費総合研究）」の一部にあたる現地研究を実施した。2歳半より3歳半の幼児に対する実験と、その母親に対する面接などを行なった。さらに、在外、帰国子女の適応、教育の条件に関する総合的研究（代表者：京大教育学部小林哲也教授）に参加して、理論的研究を分担した。

II 学会発表等

1977年5月21・22両日愛媛県松山市で開かれた日本民族学会第16回研究大会において「シカゴ西郊におけるイタリア系アメリカ人のコミュニティ生活と民族遺産——アメリカ民族集団の ethnicity 研究の一部として——」を発表した。11月23～26日福岡県志賀島で開催された第3回コミュニティ心理学シンポジウムにおいて「シカゴ西郊における地域精神衛生活動の実態について」を発表した。6月12日石川県金沢大学において開かれた北陸心理学会に出席した。

III 著 作

1. 「アメリカのイタリア人」『季刊民族学』1号, 80—95頁, 民族学振興会, 1977.
2. 「イタリア系アメリカ人のコミュニティ形成と民族文化——シカゴ西郊のコミュニティの場合——, 綾部恒雄編『アメリカの民族集団』317—386頁, 日本放送出版協会, 1978.
3. 「欧米の父親像」平井信義ほか編著『父親の事典』70—81頁, ぎょうせい, 1977.
4. 「言葉のみぶりと表情」『技術と経済』通巻132号, 1978年3月号, 132—149頁, 1978.
5. 「異文化との接触と自文化への復帰がもたらすカルチュラル・インパクトと人格の変化（序報）」, 小林哲也編『在外、帰国子女の適応・教育の条件に関する総合的研究：研究集録Ⅱ』9—14頁, 京都大学教育学部比較教育学研究室, 1978.
6. 書評 E. フロム著, 佐野哲郎訳「生きるということ」, 『青年心理』第7号, 184頁, 1978（3月号）

IV そ の 他

前年度に引き続き、日本心理学会編集委員・将来計画委員、日本教育心理学会編集委員、日本社会心理学会常任理事をつとめた。

6月11～15日 北陸学院短期大学保育科にて「精神衛生」集中講義を行なった。

7月31日～8月3日 神奈川カウンセリング研究会主催のワークショップ（於湯河原「東光閣」）において世話人の一人をつとめた。

新設予定のICU高校の「教育プログラム」研究委員の一人として8月25～27日に行われた研究会に参加した。

10月6日より2月2日まで東京大学大学院教育学研究科において「文化と人格」の非常勤講師をつとめた。またほぼ同じ期間、聖心女子大文学部において「集団の過程」を担当した。

10月7日 在日米国教育委員会（フルブライト委）による留学生選衡面接に委員の一人として参加した。

11月12日 南青山のアジア会館において、オルポート博士生誕80年、歿後10年記念の同博士を「偲ぶ会」を開催し、ICUの原教授をはじめ、依田新、宮本美沙子、青木孝悦らの諸氏が参加し発言された。

12月1～3日 北海道大学教育学部において「文化と人格」の集中講義を行なった。

12月26～28日 基督教教育同盟関東地区カウンセリング研究会のワークショップ（於中軽井沢星野温泉ホテル）に世話人の一人として参加した。

1月7日より4月1日まで朝日カルチャ・センター日本語教室へ講師の一人として毎週1回出講した。

1月7日 日本基督教教育研究所（所長小林公一青山学院大学教授）の研究会において「複合社会の人間関係の病理」について講演した。

2月16日 公立小平西高において「青年期の精神衛生をどうすすめるか」について講演した。

向井敦子助手

I 研究活動等

- 1) いわゆる認知的不協和の状況について、行動の形成と変容の観点から、状況と対応した行動の再調整であると仮説して、行動座標を用いて研究を継続している。
- 2) 1976年2月生れの女兒H.M.を対象にした縦断的な行動観察を継続している。

II 学会発表

「行動図による不協和過程の分析Ⅰ，心理学的行動座標の仮説的構成の試み」
 「行動図による不協和過程の分析Ⅱ，幼児における禁止の対象に対する態度変化」
 日本心理学会第41回大会発表論文集1118—1121（大学院深谷澄男氏との共同研究。
 口答発表者はⅠが深谷，Ⅱが向井である。）

III 著作

「準拠集団と道德性の発達（第2報告）」国際基督教大学学報Ⅰ—A 教育研究

1977, 20, 91—139 (古畑和孝教授, 明田芳久非常勤助手との共著)

明田芳久助手 (非常勤)

I 研究活動

1) 子どもの道徳性発達の心理学的基礎について, 実験社会心理学的視点から研究。

2) 心理学実験論文講読会 (ICU), 数理統計学の基礎についての研究会 (立教大学), Piaget 研究会, 道徳発達研究会 (東京大学) に参加。

3) 桐朋学園大学短期大学部 (社会心理学) で非常勤講師。

II 学会

1) 日本心理学会第41回大会 (駒沢大学, 1977年9月7日—9日), 日本教育心理学会第19回総会 (香川大学, 1977年10月16日—18日) に出席, 主として道徳発達に関する研究発表部会の討論に参加した。

III 著作

1) 「準拠集団と道徳性の発達 (第2報告)」『国際基督教大学学報 I—A 教育研究』1977, 20, 91—139. (古畑和孝教授, 向井敦子助手との共著)

2) 「適応・不適応」, 「同調」『教育学事典』第1法規, (印刷中)

3) 「発達と学習」, 「幼児期の心理」, 「(解説) ピアジェの道徳発達理論に関する諸研究」芳賀純 (編訳) 『ピアジェ研究 I』誠信書房, (印刷中)

土谷良巳助手 (非常勤)

研究活動など

1) 原一雄教授の指導のもとに, 行動調整における信号系の機能について交信行動体制および構成信号系変換特性という観点から研究し, 1978年1月, 修士論文「赤毛ザルの交信行動体制および信号系構成原則間における変換過程」を国際基督教大学大学院委員会に提出した。本研究の一部は本年度の第42回日本心理学会 (九州大学) に発表の予定である。

2) 1976年6月より, 障害児自主訓練会「さざんかの会」(石井葉代表, 東京都豊島区) において, 自閉症児を対象とした教育・訓練に参加している。

3) 1978年3月より 国立精神衛生研究所優生部A班において山本和郎主任研究員の指導のもとに, 自閉症児を対象にした地域精神衛生活動に参加している。

C 視聴覚教育研究室

視聴覚教育研究室に事務局を置く, 日本視聴覚教育学会第14回大会及び日本放送教育学会第22回大会が合同で, 1977年11月11日, 12日の両日, 香川大学教育学部において開催された。当研究室から, 教職員全員と大学院生多数が出席した。

布留武郎客員教授

I 研究活動

1977年7月11日から15日の5日間にかけてホノルルの東西文化センターで開催された「メディアと社会」と題するセミナーに出席。参加者は約60名、大部分はアジア各国から派遣された研修生であった。「テレビジョンと子供」「メディアと教育」「メディアと性の役割」その他の下位領域に分けてパネル討論が行なわれ、各国における問題点とその解決策が論じられた。布留は第1日の「テレビジョンと子供」のパネリストとして、日本における関心と調査研究の動向を述べた。「特別講演として、W. シュラムが1974年から77年にかけてサモア島で行ったTVによる価値観の変容について中間報告が行われた。Ssはハイティーンで、TVを利用できる地域と然らざる地域との差はないが、TVを利用できる地域内の視聴者と非視聴者を比べると、TVによる価値観の変容が望ましい方向に見られるという。例えば、TVの影響として権威者への服従とか保守的考え方は劣勢になり、独立性とか競争的態度等は優勢になるということであった。

II 学会発表

日本教育心理学会第19回総会（1977年10月、香川大学）において、「テレビジョンと学業成績」を発表した。

III 著作

- 1) 「児童の認知型とテレビ視聴パターン」ICU教育研究20, 1977年3月, 141—167頁。
- 2) Cognitive Style and Television Viewing Patterns of children. 1977年6月, ICU視聴覚教育研究室。

IV その他

日本視聴覚教育学会会長。日本放送教育学会常任理事及び編集委員。日本教育社会学会評議員。松下視聴覚研究財団評議員。NHK総合放送文化研究所研究委員。

中野照海教授

I 研究活動等

- (1) 1977年度放送文化基金の助成金による「映像の教育的効果とその利用に関する研究」（波多野完治代表）に参加。現在研究続行中。
- (2) 日本視聴覚教育・日本放送教育両学会の合同大会（1977年11月11日・12日、香川大学）でのシンポジウム「放送教育をめぐる諸問題」にパネリストとして参加。
- (3) The Second Asian Regional Training Course in Educational Technology (Aug. 16—Sept. 27, 1977, Tokyo) において“The Role and Function of Instructional media”を講義。
- (4) Seminar on Information, Education, and Communication in Family Planning (June 8—24, 1978, Tokyo)に Resource Person として参画。

II 著 作

- (1) 教育工学の性格づけをめぐる諸問題「日本教育工学雑誌」第2巻, pp. 43—48, 1977
- (2) Educational Technology and Open Education, Unesco Bulletin, No. 19 1978, pp. 179—186.
- (3) 『教育学大事典』(第一法規, 1978)の項目。
- (4) 編著「視聴覚教育の理論と研究」(日本放送教育協会, 近刊), および編著「教育工学の理念と方法」(学研, 近刊)

III そ の 他

前年度に続き, 日本視聴覚教育学会および日本放送教育学会の常任理事および編集委員。

NHK学校教育地方諮問委員会委員。

日本語学ラボラトリー学会評議員。

「日本教育工学雑誌」常任編集委員および編集幹事。

教育放送審議会(文部省)委員。

日本教育工学協会理事。

阿久津喜弘教授

I 研 究 活 動

1) 日本教育社会学会第29回大会(1977年9月30日—10月2日, 国立教育会館)において, 共同研究「児童のオピニオンリーダーシップ機能の分化に関する実証的研究」を発表。

2) Information Societies—A Conference Devoted to Research for Communication Policies (11—14 December, 1977, University of Washington)において, “The Japanese Path toward an Information Society”と題して研究発表。

3) 昭和52年度後期放送文化基金の助成による「学校放送の受容・遂行構造に関する実証的研究」(共同研究)を実施中。

II 著 作

- 1) 「受け手の構造」竹内郁郎他編『マス・コミュニケーション』(テキストブック社会学6)有斐閣, 1977年12月, 76—88頁。
- 2) 「学級内コミュニケーションへの参加」『特別活動』10巻10号, 1977年10月, 11—15頁。
- 3) 『教育学大事典』(全6巻, 第一法規)を共同編集中(1978年7月刊行予定)。

III そ の 他

日本視聴覚教育学会理事, 編集委員。日本放送教育学会理事, 編集委員。日本教

育社会学会編集委員，国際交流委員。

石本菅生助教授

I 研究活動等

CAIシステムの開発と学習に関する諸変数の研究。

文部省科学研究（試験研究(2)）漢字教育のためのCAIシステムの開発と評価（代表井上和子教授）に参加。手書きによる文字情報や活版印刷の文字や図などの資料をテレビカメラを用いて撮影，コンピュータの補助記憶媒体に蓄積し，これを編集してCAI教材のファイルを作成するシステムを開発した。これに引き続き，1978年度も簡易テレビディスプレイ装置を用いたCAI学習端末装置の開発と教材ファイルの拡張及び学習行動の分析を行っている。

II 著作

「教師教育と視聴覚メディア」視聴覚教育の理論と研究，日本放送教育協会，近刊。

項目執筆「教育学大事典」第一法規出版

III その他

「日本教育工学雑誌」編集委員

飯塚泰弘助手（非常勤）

研究活動等

1) 1977年10月，日本教育心理学会第19回総会（於香川大学）において，「テレビジョンと学業成績」を布留武郎教授と連名で発表（同総会発表論文集674—675頁所載）。

2) 著作「児童のテレビ視聴と学業成績」，放送教育研究第6・7号，日本放送教育学会編，1977年3月，33—44頁。

浜野保樹助手（非常勤）

I 研究活動等

1) 1977年10月～1978年3月，教育イノベーション研究会（於日本映画教育協会）へ参加。

2) 1977年10月1日，日本教育社会学会第29回大会（東京大学）において，阿久津喜弘教授らと連名で，「児童のオピニオン・リーダーシップ機能の分化に関する実証的研究」を発表（同学会論文集，89—92）。

3) 1977年11月11日，日本放送教育学会・日本視聴覚教育学会合同大会（香川大学）において，「教育イノベーション研究動向の分析」を発表（同学会論文集，8—9）。

II 著作

1) 文献紹介：R. Brown(ed.), *Children and Television*, Sage, 1977. 『放送

教育研究』, 第6・7号, 1977, 84—86頁

2) 「学校・教師の変革をめざして(1)」阿久津喜弘, 生田孝至, 浜野保樹, 平井出けい子, 『視聴覚教育』, 32(2), 1977, 24—27頁。

3) 「学校・教師の変革をめざして(2)」阿久津喜弘, 生田孝至, 浜野保樹, 平井出けい子, 『視聴覚教育』, 32(3), 1977, 24—29頁。

4) 「学校・教師の変革をめざして(3)」阿久津喜弘, 生田孝至, 浜野保樹, 平井出けい子, 『視聴覚教育』, 32(4), 1977, 36—41頁。

D 理科教育研究室

研究室メンバーは各自専門分野の研究課題に取り組むとともに理科教育に関する種々の研究活動に励んでいる。大内謙一教授は1978年4月より開校することになったICU高等学校の校長の職に専心されるため, 長年勤められた大学の職を3月をもって辞された。又ウオース教授は向こう2年間教養学部長の任務を, 三宅教授は図書館長の任務を負うことになり大学行政の面でも活躍している。

研究室の行事の講演会として2月6日に大日本図書伊藤善郎氏による「戦後理科教科書作成の変遷」と3月15日に和光大学の田中実氏による「自然科学と教育」が催された。

三宅彰教授

I 研究活動

高分子物性の理論的研究

理科教育におけるエネルギーおよびエントロピー概念の位置づけ

II 学会発表等

Stiff chain の理論, VI; 1977年4月4日(日本物理学会分科会, 山口大学); 星野義昭と共同発表

束縛回転鎖の両端間距離4乗平均; 1977年5月24日(高分子学会年次大会, 京都)

熱学序論—仕事と熱; 1977年9月6日(神奈川県立教育センター理科教育講座)

高分子鎖の拡がり と 溶媒和; 1977年10月9日(日本物理学会年会, 東京理科大学)

ねじれのある stiff chain の動力学; 1977年10月30日(高分子討論会, 東京工業大学)

剛い鎖の理論; 1978年1月27日(高分子学会マイクロ・シンポジウム, 大磯)

III 著作

(翻訳) 触れ合う原子—液体と団体の物性(オックスフォード物理学シリーズ5), 丸善, 1977年4月。

「ICUの non-Japanese Student」IDE, No. 186(1978年1—2月号) 46—52頁

石川光男教授

I 研究活動

- (1) 生体高分子に対する放射線効果
- (2) 高分子電解質の溶液中における形態変化
- (3) 物理学習の総合的評価法

II 学会発表等

- (1) 石川光男, 高倉かほる: X線及び紫外線によるポリLグルタミン酸のヘリックス破壊と分子量変化; 1977年10月30日(日本放射線影響学会, 仙台)
- (2) 石川光男, 高倉かほる: マイレン酸スチレン共重合体の形態変化—NMRと熱量計による測定; 1977年9月29日(日本生物物理学会, 東北大)

III 著作

- (1) "The Conformational Transition of Styrene-Maleic Acid Copolymer Studied by NMR Measurements"; Rep. Prog. Polymer. Phys Japan, 20 (1977), 509-510 (M. Ishikawa, K. Takakura)
- (2) "Helix Destruction and Molecular Weight change in Poly-L-Glutamic Acid by X-rays and UV Irradiation"; J. Radiat. Res. 19 (1978), 20, (M. Ishikawa, K. Takakura)
- (3) 「大学教養課程における物理教育の改善—科学的思考力の育成と評価」: 教育研究 20 (1977), 169—181
- (4) 「高等学校における物理学習の総合的評価」: 科研費特定研究, 研究報告 (1977)

柿内賢信教授

I 研究活動

1. 水の熱膨脹率における履歴現象
2. 科学における学習過程
3. 客観と思考の記述のための言語
4. 科学社会学の学際的研究

II 学会発表等

- 学習の心理過程と運動概念の形成 (1977. 8月, 日本科学教育学会・東京)
- 学習のなかの思考過程 (1977. 10月, 日本物理学会, 東京)

III 著作等

著書

- a. 人間と自然について NHKブックス (1977)

論文

- a. 職業教育及び技術教育の課題, 産業教育26 (1976) 14

- b. アメリカにおける最近の科学教育研究, 科学教育 1 (1977) 45
- c. A comment on Further Policy for U. S.-Japan Science Cooperation in the field of Education in the Sciences. Status Report, U. S.-Japan Cooperative Science Program p. 30 (1977)

IV その他の活動

教育課程審議会, 大学設置審議会委員, IUPAP 物理教育委員会委員, 育英会奨学生選考委員, プリティツシカウンスル選考委員, 財団法人俱進会理事長, 日本科学教育学会顧問

ドナルド・C・ウォース教授

I 研究活動

Concerning Solar Energy, especially photovoltaic cell applications.

ロナルド・リッチ教授

I 研究活動

Further development of the HBr Scheme of Qualitative Analysis (intended more for teaching fundamental reactions than for practical analysis)

勝見允行教授

I 研究活動

植物ホルモンの膜機能, 特に ATPase に及ぼす影響, 植物細胞の酸生長とオーキシン生長との関係。トウモロコシ異突然変異株間の混合組織培養によるジベレリン生産などについて研究をすすめている。

II 学会発表

- a. キウリ下胚軸細胞壁におけるグリコシダーゼ活に及ぼすオーキシンの影響。日本植物学会第42回大会1977 (勝見允行, 山本ゆり)
- b. ジベレリン——オーキシン伸長作用に及ぼす光の影響。日本植物生理学会年会1977 (風間晴子, 勝見允行)。
- c. ジベレリン及び cAMP による ATPase 活性の促進。日本植物生理学会年会1977 (勝見允行, 越谷和雄, 泉谷礼子)。

III 著作等

論文発表

- a. Auxin-gibberellin relationships in their effects on hypocotyl elongation of light-grown cucumber seedlings VI. Promotive and Inhibitory effects of kinetin. *Plant & Cell Physiology* 19: 190-198 (1978)

著作

高等学校教科書 生物 I 三省堂 (分担執筆)。

山口俊夫教授

I 研究活動

骨格筋の興奮収縮連関について

II 学会発表

Dantrolene Na₂ の両生類骨格筋の興奮収縮連関に及ぼす作用機序（日本動物学会1977年10月山形大）

III 著作

The effect of hypertonic solutions on contracture tension and volume in *Mytilus* smooth muscle. *Comp. Biochem. Physiol.* 58 A : 405-407. (H. Sugi, T. Yamaguchi & H. Tanaka)

その他の研究メンバー

I 学会発表（理科教育学会，1977. 9. 千葉）

- a. 初等物理教育史その1，滝川洋二，岩崎敬道
- b. 初等物理教育史その2，岩崎敬道，滝川洋二
- c. 熱から入るエネルギープランの授業報告・その2，永田英治，三宅彰
- d. 力学教育の問題点—高校レベル—森隆，滝川洋二，永田英二，岩崎敬道
- e. 振動の授業におけるTPシートの活用，深井隆夫，阿部礼子，山楨雅信

II 著作等

- a. 力学入門，滝川洋二，左巻健夫，理科教室20. (9), 1977.
- b. ビニールホースと水を使った「大トリチエリの実験」永田英二，森隆，山楨雅信科学の実験 28(5), 1977
- c. 子どもの抱きやすい「熱の伝導」のイメージと授業展開—教材開発の事例と指導例—永田英二，理科の教育26(12), 1977

E 教育社会学研究室

原 喜美教授

I 研究活動など

(1) アジア経済研究所 豊田俊雄氏が代表者となり，同研究所所員 金子元久氏，米村明夫氏，国立教育研究所 梶田美春氏，村田翼夫氏，東京工業大学 新井郁男氏と共同で「アジアにおける学卒失業の問題について—その経済，文化，社会的要因の分析—フィリピン，タイ，インドネシアを事例として」研究調査を行なった。1977年12月末より1978年1月中旬までフィリピンに出張。主としてマニラの Santo Tomas 大学の卒業生の追跡調査を行なった。

(2) 「婦人の職業による社会還元」について，2年間にわたる研究を始めた。山梨県，秋田県の農村在住の婦人を対象にして調査を行なった。（文部省科学研究費

による。)

(3) Ateneo de Manila 大学と I C U の共同研究として、「織物工場で働く低賃金女子労働者の職業生活，家庭生活と，工業化の関連」についての研究計画の立案を行なった。

(4) 日本教育社会学会第29回大回において、「フィリピンにおける教育と職業の関連」について報告を行なった。

(5) 長野県立西高等学校創立記念日に、「新しい女性の生き方」について講演を行なう。

(6) アジア教育問題研究会において、「フィリピンの社会，文化的背景」について報告を行なう。

(7) 国際理解に関する集会，セミナー等で数回講演，助言を行なう。

II 著 作

(1) 「フィリピンの女性と教育」 I C U 教育研究20に掲載。

(2) 「女性と学問・能力」『月刊家庭科教育—性別役割分業思想と家庭科教育』

1977年7月

(3) 「フィリピンの青年」『青年心理』5

(4) 「海外，こども，教育」田子勉，生江義男，松山幸雄，原喜美『国際交流』

14

以上

F 英語教育研究室

英語教育関係職員による主な行事は下記の通りである。

1977年7月23日～8月5日 第2回 I C U 言語科学夏季講座

1977年7月30, 31日 第2回幼児言語学 Symposium

1977年7月23, 24日 第4回言語社会学 Symposium

1977年8月30日—31日 第16回 I C U 夏季言語学研究会

1977年8月31日 英語教育専攻の卒業生，在校生の懇親会（大学食堂）

1978年1月28日～2月5日 第1回冬季言語学セミナー 国際交流基金と文部省科学研究費補助金（特定研究一言語2，代表者：井上和子）より補助を受け，MITの教授 John R. Ross を講演者として招いた。

A. 言語学研究室 井上和子

I 研究活動

昭和52年度科学研究費補助金（特定研究 言語(2)）を文部省より交付され，次の研究課題のもとで，研究会を開いたり，シンポジウムに参加したり，その結果を報告書として印刷した。

研究課題：日本語の基本構造に関する理論的実証的研究

II 学会発表

“‘Tough’ sentences in Japanese”. (LSA Symposium on problems of Japanese syntax and semantics at the University of Hawaii) 1977. 7

「格助詞と文法関係」(科学研究費補助金特定研究「言語」シンポジウム) 1977. 11

III 著作

「日本語の論理性」『岩波講座日本語』月報 1977.

“Interim Report on Learning Problems Found in Second Language Learning : Transitive—Intransitive—Test Stage II”『科学研究費補助金試験研究報告「日本語文法の機能的分析と日本語教育への応用』1977.

「格助詞と文法関係」『科学研究費補助金特定研究「言語」シンポジウム予稿集』1977.

小林栄智教授

I 学会活動

- ・日本英文学会（於明治学院大学）出席（5月）
- ・中世英文学談話会の春（於新潟大学），秋（於青山学院大学）に出席（7月，11月）

II 論文

- ・ “The Prelude to Beowulf’s Fight with Grendel” 『教育研究』20号(1977), 183—92.
- ・ “The Old English Apollonius of Tyre,” *Annual Report*. volume 3 (1978), 33—85.

III その他

旺文社『新英和辞典』（6人で編集中）

村木正武教授

I 学会発表等

- a. “Sikanai Construction and Predicate Pestructuring”, LSA Symposium on Problems in Japanese Syntax and Semantics, University of Hawaii. (7月22日)
- b. “前提の問題” 文部省特定研究言語シンポジウム日本語の構造 (11月29日)

II 著作

- a. “Certain ambiguities and relative clause structure” *Descriptive and Applied linguistics* 10. 189—202. (4月)
- b. “Review : John Hinds, 1976 *Aspects of Japanese Discourse Structure*, 開拓社,” 『英語学』16. 116—129. (5月)

- c. "Comments on Nishiyama's 'Notes against Case Grammar,'" 井上和子編『科学研究費補助金試験研究報告—日本文法の機能的分析と日本語教育への応用』195—203. (10月)

F. C. Peng 教授

I 著 作

- a. 「アイヌ民族の過去と現在」 F. C. パン, P. ガイザー共著, 文化評論出版, 1977. 4.
 b. 「発達と習得における言語行動」 F. C. パン編, 文化評論出版, 1977. 10.
 c. 「環境とことば」 F. C. パン編, 文化評論出版, 1977. 11.
 d. 「手話の諸相」 F. C. パン, 田上隆司共編, 文化評論出版, 1978. 2.

2. 大学院教育学研究科修士論文

1977年6月卒業者 6名

A. 教育哲学

金子 幸子 日本婦人の自立と解放の課題 (1914~1944) ——河崎なつの身の上相談を中心として——

照井 見国 エレン G. ホワイトの教育思想

B. 英語教育法

藤田 悟 An Analysis of Existential Sentences in English
 林 裕 Constraints on English Pronominalization in Terms of Focus and Presupposition

吉岡 文夫 A Study of the Image Structures in "HAMLET"

山口 正子 Formation of Verbal Behavior of Auditory Handicapped Children : Case Study

1978年3月卒業者

A. 教育哲学

手塚 美雄 シカゴ実験学校にみられるジョン・デューイの教育思想

B. 教育心理学

福本美紀子 未熟児の体動に関する発達的研究

佐山 董子 学級における友人選択・被選択と自己評価の関係

土谷 良己 赤毛ザルの交信行動体制および信号系構成原則間における変換過程

C. 視聴覚教育法

- 金 英 洙 フィードバック・チャンネルの相違に基づく人間コミュニケーション効果に関する研究
- 水野 晴光 外国語教育におけるメッセージとメディアの提示順序の効果に関する研究
- 長田 順子 熟慮・衝動型と外国人児童の日本語の読み能力に関する研究
- 竹中 真 CMソングと学校音楽との関係についての実証的研究

D. 英語教育法

- 栗畑由起子 On the Semantics of *ANY*
- 倉田 清 A Study of Reference in English and Japanese Narrative Discourse
- 野崎 陽子 *Genji Monogatari* In English? To what extent is it possible to translate Japanese literature into English? (— a technical evaluation of Seidensticker's *The Tale of Genji*)

E. 理科教育法

- 阿部 礼子 沿面放電を用いた電磁気の実験教材
- 永田 英治 評価テストと授業記録による学習過程の分析——エネルギー概念の形成

3. 教育実習報告

1977年度の教育実習には95名（都の受入れ数38名）の学生が参加した。その詳細は次のとおりである。

1. 実習生総数 95名

- 男 子 36名
- 女 子 59名

2. 実習日程

- 1977年 5月2日～5月14日 高津中（千葉県）
- 5月30日～6月11日 三鷹市立第五中，学芸大附属大泉中（練馬区）市立宮城野中（仙台市），北陸学院（石川県），城北中（新潟県）
- 6月1日～6月14日 春日丘高（大阪府），岡山大安寺高（岡山市）
- 6月2日～6月16日 清明学園中等部（大田区），神戸女子学院中等部（西

宮市)

- 6月4日～6月17日 明星学園中(三鷹市)
- 6月6日～6月18日 三鷹市立第一中, 三鷹市立第三中, 調布市立第五中, 調布市立第七中, 小金井市立東中, 小金井市立緑中, 調布市立神代中, 立川市立第四中, 府中東高, 県立前橋女子高(前橋市), 区立関中(練馬区), 飯田高(長野県), 横須賀高(神奈川県), 市立上諏訪中(諏訪市), 市立西中(倉敷市), 大妻女子大中野女子高(中野区), 光塩女子学園(杉並区), 騎西中(埼玉県), 都立上野高(台東区), 城北高(板橋区), 日本女子大附属中(文京区), 麻布中高(港区)
- 6月13日～6月25日 武蔵野市立第三中, 日本三育学院高(広島県), 県立湘南高(藤沢市), 東京教育大附属高(文京区), 東洋英和女学院(港区), 市立横浜商業高(横浜市), 函館ラサール高(函館市), 麗沢高(柏市), 区立用賀中(世田谷区), 県立斐太高(岐阜県)
- 6月20日～7月2日 県立原町高(福島県), 鷗友学園(世田谷区), 県立外語短大附属高(神奈川県), 女子学院中(高松市)
- 7月11日～7月23日 県立長野高(長野県)
- 9月1日～9月14日 県立邑久高(岡山県), 町立美和中(山口県)
- 9月2日～9月16日 活水高(長崎市)
- 9月5日～6月17日 西有田中(佐賀県)
- 9月12日～9月24日 三鷹高, 市立行田中(行田市), 戸板女子短大(港区)
- 9月19日～10月1日 三鷹市立第二中, 小金井市立第一中, 小金井市立第二中, 小金井市立東中, 浜松北高(浜松市)
- 10月1日～10月17日 広島大教育学部附属中(広島市)
- 10月3日～10月15日 埼玉大教育学部附属中(浦和市), 町立広陵中(奈良県), 市立中部中(一宮市)
- 10月4日～10月18日 十文字高
- 10月6日～10月20日 県立伊東高(静岡県)
- 10月17日～10月28日 女子学院中(千代田区), 工学院大学高(八王子市)
- 10月24日～11月7日 捜真女学校(横浜市)
- 11月16日～11月30日 明星学院中(三鷹市)

光塩女子学院	鷗友学園	東洋英和女	横浜商業高	北陸学院	都立上野高	函館ラサール	外語短大附属	城北高	麗沢高	十文字高	県立邑久高	浜松北高	麻布学園	戸板女子短	岡山大安寺高	高松東高
		1				1							1			
1	1		1	1	1		1	1	1	1	1	1		1	1	1
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1

県立長野高	工学院大学高	捜真女学校	合 計
			10
			7
			4
1	1	1	73
			1
1	1	1	95

4. 学科別

学 科	性 別		合 計
	男	女	
人文学科	3	8	11
社会科学科	8	5	13
理 学 科	3	6	9
語 学 科	7	17	24
教育学科	5	9	14
大学院教育学	3	4	7
大学院行政学	0	0	0
大学院比較文化	1	2	3
聴 講 生	4	10	14
合 計	34	61	95

5. 教員免許状取得状況

1978年3月卒業生360名中、教員免許状を取得した学生の詳細は次のとおりである。（聴講生を除く）

教養学部（社会9，理科4，数学1，英語42，宗教4）

学 科	免許状取得者実数	中学校教諭一級免許状	高等学校教諭二級免許状
人 文 学 科	12	15	14
社 会 学 科	10	11	12
理 学 科	5	4	5
語 学 科	15	15	15
教 育 学 科	11	12	13
合 計	53	57	62

大学院

研 究 科	専 攻	高等学校教諭一級免許状
教育学研究科	理科教育法	1
	英語教育法	2
行政学研究科	行政学専攻	0
合 計		3

また、教員就職状況は下記のとおりである。

公立小学校 男1名

公立中学校 男3名 女4名（英語）

私立中学校 男1名 女1名（英語）

公立高等学校 男6名 女6名（数学1名，社会1名，英語10名）

私立高等学校 男2名 女2名（理科1名，英語3名）

4. ひとのうごき

■新任・就任・辞任

青木 繁助手（非常勤）（視聴覚教育）：77年4月より着任。

田中清彦助手（非常勤）（教育学）：77年4月より着任。

山口和孝助手（非常勤）（教育学）：77年12月より着任。

阿久津喜弘準教授（教育コミュニケーション学）：77年4月より教授に昇任。

大内謙一教授（理科教育法・化学）77年3月、国際基督教大学高等学校校長に就任の為、辞任。

内山慶子助手（非常勤）（心理学）：78年3月退任

■逝去

日高第四郎客員教授（教育哲学）：77年12月14日逝去。

■海外出張・休職・帰任

柿内賢信教授（理科教育法・物理学）：日米科学協力事業の一環として委員会に提出すべき報告書を作成するため3月10日から4月30日までアメリカ各地の教育関係機関を訪問し、(1)学校レベルの科学教育 (2)一般教育における科学 (3)全国的規模の教育評価の実施状況を視察。10月13日から10月28日迄、北米、ボストンにおける科学社会学会第2回年会およびワシントン国務省における日米科学協力計画合同委員会に出席。

原一雄教授（心理学）：7月11日から17日迄、北米、コロラド州ボウルダにある行動遺伝学研究所を訪問、その他、環境科学の視察。

原喜美教授（教育社会学）：7月11日から29日迄、北米、ボストン大学、シカゴ大学へ研究および国際社会学会の社会における性の役割に関する実行委員会の委員として婦人の地位に関する会議へ出席。8月4日から14日迄、アテネオ・デ・マニラ大学、フィリピン文化研究所へ研究のため出張。

大内謙一教授（理科教育法・化学）：6月16日から7月5日迄、欧州、8月22日から9月10日迄、北米、中南米諸国へ海外在留日本人子弟に関する教育事情の視察。

長清子教授（思想史）：11月12日から19日迄、ニューヨークへ、UBCHEA理事会出席のため出張。

石川光男教授（物理学）77年12月より78年5月迄休暇。

川瀬謙一郎準教授（教育哲学）：77年9月より78年2月迄、休暇。

星野命教授（心理学）：77年7月一年間の休暇より帰任。